

学位論文審査及び最終試験報告書

学位申請者氏名	池谷 真梨子		学籍番号	1242201		
申請学位 (専攻分野)	博士 (家政学)		専攻	総合生活		
論文題目	保育所における乳幼児の手づかみ食べの発達過程およびその関連要因の分析					
成績	論文審査及び最終試験			合格		
学位論文 審査委員		氏名	職名		氏名	職名
	主査	湊 久美子	教授	審査 委員	堤 ちはる	教授
	審査 委員	中島 肇	教授			
		布施谷 節子	教授			
		鈴木 みゆき	教授			

論文審査の要旨

本博士論文「保育所における乳幼児の手づかみ食べの発達過程およびその関連要因の分析」は、保育所に通う乳幼児を対象に「手づかみ食べ」の発達過程を明確にし、その関連要因を考察した論文である。

はじめに、保育所に通う乳幼児 10 名を対象とした週に 2 回 (計 133 回) のビデオ観察調査を実施した。「手づかみ食べ」が最も多く発現した月を基点としてみると「手づかみ食べ」の発現はその前約 2 ヶ月で急激に増加し、その直後 1 ヶ月で急激に減少して「食具食べ」に移行する発達過程の特徴を明らかにした。乳幼児によりその過程の特徴に 3 パターンあり、「手づかみ食べ」をよくする児としない児がいたことを明らかにした。また、「手づかみ食べ」は、誰かに介助されて食べていた食事形態から、自ら食べる行動への移行を促す食行動であることを示し、「手づかみ食べ」の重要性を指摘した。次に「手づかみ食べ」が多く起こる料理法、食材や形、味について考察し、調理法では「揚げる」、形では「長さが長い」、食材では「肉」、味づけでは「酢を用いない」などの特徴を示し、料理の大きさや乳幼児自身の嗜好が「手づかみ食べ」に影響していることを指摘した。さらに、対象となった乳幼児の母親に対して「手づかみ食べ」に対する考え方や食事場面での児への介助などについてインタビュー調査を実施した。「手づかみ食べ」を多くする児の母親は「手づかみ食べ」に積極的な考えがあり、児が主体的に食べる食環境を整えており、「手づかみ食べ」の発達過程の違いに、家庭での食事介助の違いが影響することを明らかにした。最後に、東京都認可保育所 1627 園の保育士への質問紙調査を行い、「手づかみ食べ」の実態や保育士の考えを調査した。多くの保育所は「手づかみ食べ」を積極的に、職員間の連携がとれていた。保育士は、「手づかみ食べ」は園児の食べる意欲を育てるために重要であること、「手づかみ食べ」を多くする園児はその後の発達過程で「食」に対して積極的であると感ずること、「手づかみ食べ」に相応しい料理の特徴があることについて考えていた。これらの保育士の考えは、ビデオ観察から導き出した結果と同様の結果となり、実際の園児の実態の評価を裏付ける結果となった。

以上の結果を総合考察して、乳幼児の「手づかみ食べ」の発達過程には各児により特徴があり、家庭での食事介助の状況が影響していること、「手づかみ食べ」しやすい料理の特徴があること、多くの保育士は、「手づかみ食べ」は重要であると考えていることから、今後、乳幼児の「手づかみ食べ」を促すためには、保育所には全職員が「手づかみ食べ」の重要性について共通認識し、保育士と栄養士が連携して各児の発達段階に応じた適切な料理の提供や、手助けしすぎない食事介助を行うこと、家庭では養育者が「手づかみ食べ」の重要性を理解して、児の意欲を受容して児が主体的に食べる食環境を整えることなどが重要であり、これらを実現する環境を整えるために保育士や養育者への支援も必要であることを提言した。

2015 年 11 月 28 日の予備審査、12 月 21 日論文提出、その後の指導による論文修正を経て 2016 年 1 月 30 日公聴会、2 月 26 日最終審査を実施した。特に総合考察については審査員の助言により「手づかみ食べ」の推進のための方向性について論考した内容を追記して博士論文を完成させた。ビデオ観察の膨大なデータの収集と解析を実施したこと、複数の研究手法で目的を解明したこと、審査員の助言にすべて丁寧に対応して論文を加筆修正したこと、今後の研究活動への展開について明確にできていること、本論文に関わる原著論文が 4 本 (うち 1 本は英文) 公表されたことを総合評価し、博士 (家政学) 取得について「合格」と判定する。